

10 非対格性仮説

非対格性仮説 (unaccusativity hypothesis) を端的に述べると、「自動詞は2種類に分かれる」ということになる。この仮説を支持する意味的、統語的、形態的な証拠が多く存在し、2種類の自動詞は、それぞれ**非能格動詞 (unergative verb)** と **非対格動詞 (unaccusative verb)** と呼ばれる。

意味的な基準に基づき2種類を分ければ、非能格動詞は意図的な行為 (work, smile など) や非意図的な生理現象 (cough, sneeze など) などを示し、一方、非対格動詞は位置変化 (fall, sink など) や状態変化 (freeze, melt など)、また、存在・出現・消滅 (occur, arrive, disappear など)、音・光・臭いなどの発生を表す動詞 (click, shine, smell など)、そして、アスペクト動詞 (begin, end など) である。しかし、意味は捉えがたく、信頼できる判断基準とならないことが多い。

より信頼できる判断基準は統語的・形態的振る舞いに基づくものである。英語に焦点を絞ると、非対格性仮説を支持する証拠として、おおよそ10の基準があると考えられる。まず、非能格動詞のみに許される構文・現象として (i) on purpose や intentionally との共起、(ii) 擬似受動文、(iii) 同族目的語構文、(iv) make one's way 構文、(v) (自動詞であるにもかかわらず) 目的語を用いる結果構文が挙げられ、これらの現象・構文は非能格動詞のみが可能となる。一方、非対格動詞のみが可能な現象・構文として (vi) there 構文、(vii) 主語を修飾する結果構文、(viii) 過去分詞形となり名詞を修飾することが挙げられる。最後に、非能格動詞と非対格動詞が異なる振る舞いをする現象として、(ix) 名詞化の際、非能格動詞は by と共起をするが、非対格動詞は of と共起する、(x) 名詞+動詞の複合語の際、非能格動詞は特殊な意味を生み出すが、非対格動詞は合成的な意味を生み出す、という違いが存在する。

ここでは紙面の都合上、すべてを論じることができないが、**結果構文 (resultative construction)** を取り上げ、次の点が成り立つことを示す。

(1) a. 非能格動詞の主語は他動詞の主語に対応する。

b. 非対格動詞の主語は他動詞の目的語に対応する。

結果構文の代表的な例は、次のように他動詞が使われている文である。

(2) Mary broke the glass to pieces.

(2) のような構文では、文尾に生じている結果句 (to pieces) が目的語を修飾し、動作の結果を表す。このような結果構文の重要な性質は、次の (3) が示すように、結果句が主語を修飾しないという点である (文頭の*は当該の文が非文であるこ

とを示す)。

(3) *Mary broke the glass to tears.

(3) が意図している意味は「メアリーがグラスを壊し、その結果、メアリーは泣いてしまった」というものであるが、このような意味を持つことはない。

この点を踏まえ、自動詞の例を見てみると、次のように結果句が主語を修飾する例が存在する。

(4) a. The glass broke to pieces.

b. The lake froze solid.

(4) のように非対格動詞が使われる場合、結果句が主語を修飾することが可能である。このため、(1b) が示すように、非対格動詞の主語は、他動詞の目的語と似た振る舞いを示す。

一方、非能格動詞の場合、主語が他動詞の主語と同様に振る舞う。つまり、主語は結果句からの修飾を受けることができない。確かに、やや特殊な用法ではあるが、非能格動詞が結果構文内に生起することは可能である。その例を (5) と (6) に示す。(5)、(6) では、通常は生じることのない目的語を選択し、結果句がその目的語を修飾する。

(5) I laughed myself sick.

(6) a. Sylvester cried his eyes out.

b. Sleep your wrinkles away.

(5) では、再帰代名詞が目的語の位置の現れ、結果句がその目的語を修飾する。(6) では、目的語と結果句がそれぞれ「変化を被る対象」と「変化を受けた結果」を示している。このように、非能格動詞の場合、自動詞であるにもかかわらず、目的語+結果句の両方を生起させることにより文法的な結果構文を生み出すことができる。

しかし、重要な点は、結果句は主語を修飾することができず、(1a) で示した通り、非能格動詞の主語は他動詞の主語と似ているという点である。

最後に、非能格動詞と非対格動詞の派生について簡単に論じる。問題となるのは、非対格動詞の主語が他動詞の目的語と同様に振る舞うという点である。これを説明する1つの方法は、移動を用いる方法である。非対格動詞の主語はももとは「目的語」の位置に存在していたが、派生の途中で主語の位置へ移動するという考え方である。つまり、受動文の主語と同様に、目的語から主語への移動を仮定する説明方法が存在する。この移動を仮定することにより、(1b) を適切に捉えることができる。

(菅野 悟)